

仙台白存舎村大家政 田中弘子

目的 近年日本において、子どもへの教育環境は著しく変容してきている。子ども達は孤立させられる傾向が強くなり、その結果、一つの側面として、生活習慣上のおくれや社会意識・情緒面のおくれが目立っている。近世近代の農山漁村においては、子どもに関する習俗、神事、祭事、あるいは子ども組やそれに類する集団の行動の豊かさは、諸外国に比較しても、特異なことである。これを産業構造・地域・家族等との関係において考察し、育見観、大人と子どもの関係性、子どもの遊びの文化について検討を深めたい。また、現代においてその再生がどのような形で可能であるかを探りたい。

方法 東北東部を中心とする先行文献及び郷土資料の調査。歴史民俗資料館、歴史博物館等の、玩具・用具・わらべ歌・童謡・遊び唄等資料の検索、及び、子どもの「集団行動」が形式として残存する事例の収集。古老や郷土史家の証言の採集を行なった。

結果 1. 産育習俗は地域差があるが一定の基礎があり、村内の大人達の子どもに対する願いや喜びを分かち合う、同時に、村の承認や利益と結びついている。2. 「クツまじは神のうち」という観念があり、近世の「間引」を含めて死七草は高く、出生が登録されることも少なかった。3. およそ7歳から14歳まで、「子ども組」またはそれに類する子ども集団に所属した。この夕子型集団において、遊びと共にすでに労働力としての準備と訓練が念まれ、村の仕事の一端を担った。また、その共同行動を通して、肉体的・技術的・精神的成長を獲得したと推測される。4. 現在、子ども集団による戸外の遊びと労働の実現は、大人達の意識的かつ組織的な、場所と機会の設定の努力が必要とされる。